

# 病理部

## 教授（部長）

深山正久\*

## 准教授

宇於崎宏\*（副部長），石川俊平\*

## 講師

高澤豊（病理部），柴原純二（米国留学）

## 病院講師

牛久哲男

## 助教

池村雅子，前田大地，松坂恵介（病理部），森川鉄平（病理部，米国留学），日野るみ\*，篠崎綾\*，新谷裕加子\*

## 医員

市村香代子，黒飛京子

ホームページ <http://pathol.umin.ac.jp/>

## 沿革と組織の概要

病院病理部と病因病理学専攻人体病理学・病理診断学分野（\*）は、一つのユニットとして機能し、東大病院の病理診断業務（剖検・病理診断）と、人体病理の教育，研究に当たっている。

平成 23 年度の病理部固有のスタッフ構成は、講師 1 名，病院講師 1 名，助教 3 名，医員 2 名であった。

## 診療（病理診断・剖検）

平成 23 年度は、生検 14,716（検体数 19,770）件，細胞診 26,427 件，迅速診断 701 件，迅速細胞診 596 件，院内剖検 64 例（剖検率 18%），受託剖検 2 例であった。

例年通り剖検症例に関する検討会（病院 CPC）を、病院において毎月 1 回行い、毎回 2 症例について検討している。手術症例に着いては、以下

のカンファランスを行っている（責任スタッフ）。呼吸器外科（前田助教），肝臓・胆膵（篠崎助教），泌尿器（新谷助教），婦人科（前田助教，高澤講師），乳腺（池村助教），整形外科（牛久病院講師）。生検について臨床各科と定期的にカンファランスを行っている臓器は，腎臓（宇於崎准教授），皮膚（高澤講師），消化管（牛久病院講師，松坂助教）である。

我々の業務上の目標は、正確な診断を可能な限り早く臨床に提供することであり、迅速組織標本作製装置を用い、one-day pathology を実現するべく、検討を重ねている。また、報告書，スライドのレビューを全例について行っており、確実な診断を保証するため、継続的に努力している。

バーチャルスライド・スキャナーを導入し、すべての生検標本をデジタル情報として保存している。今後、病理画像を院内に広く提供すること

を目指している。この件について、宇於崎准教授が中心となって取り組んでいる。

厚生労働省「診療行為に関連した死亡の調査分析モデル事業」への協力を継続している。

## 教 育

M2 を対象に系統病理学講義，実習を行っている。ベッドサイドラーニング (BSL) は M4 を対象に行っている。クリニカル・クラークシップでは，3名の学生を受け入れた。

卒後臨床研修制度で各研修医に義務付けられている CPC レポートの指導を行った。平成 22 年度から CPC ダイジェストを院内に公開すると共に，臨床研修医が自ら問題を解決して，CPC の内容を理解できるよう，CPC e-learning を作成した (高澤講師，池村助教)。

また，研修二年目のプログラムとして，平成 23 年度には，5名の研修医 (延べ 18ヶ月) を病理部に受け入れた。

## 研 究

宇於崎准教授は，富士ゼロックス・産業技術総合研究所等と共同研究を行ってきた (「自然言語処理とオントロジーに基づく自由テキスト入力支援の医療文書への応用」)。科学技術機構「研究成果最適展開支援プログラム ハイリスク挑戦タイプ」(A-STEP) 平成 23 年度採択課題となった。

高澤講師を中心に，死後 CT 画像の病理解剖を補助する手段としての有用性に関する研究を継続しており，オートプシー補助 CT 室に設置した CT 装置を用い，死後画像と病理解剖結果との対比を行っている (文献 7, 8)。

手術症例に関するカンファランスを基に，腫瘍性疾患の概念整理，病理形態学的解析に取り組んでいる。また，東京大学先端科学技術研究所ゲノムサイエンス部門と共同で，癌特異抗体を用いた新たな診断，治療方法の開発に取り組んでいる。

胃癌のセンチネルリンパ節への転移を検出するための抗体パネル作成のため，原発巣，転移巣についての組織マイクロアレイを構築し，検討を進めている (牛久病院講師，松坂助教)。

## 出版物等

人体病理学・病理診断学分野の該当項参照。